

鳴門教育大学附属幼稚園

学校関係者評価報告書

(平成25年度)

平成26年3月

学校関係者評価委員会

目 次

学校関係者評価委員会が実施した学校評価について	1
I 学校関係者評価結果	2
II 評価項目ごとの評価	5
1 教育課程・指導	5
2 保健安全管理	5
3 組織運営	5
4 研 修	6
5 教育環境整備	6
6 教育実習	7
7 センターの役割	7
参考：学校の現況及び目的	8

学校関係者評価委員会が実施した学校評価について

はじめに

本報告書は、保護者、大学教員、その他の学校関係者で構成された鳴門教育大学附属幼稚園学校関係者評価委員会が、附属幼稚園の教育・研究活動の観察及び園長をはじめとする教職員との意見交換等を通じて、同園の自己評価結果について概評することを基本に学校関係者評価を実施し、その結果を取りまとめたものである。

1 評価の目的

学校評価は、次の3つを目的として実施するものである。

- ① 学校が、自らの教育活動その他の学校運営について目指すべき目標を設定し、その達成状況や達成に向けた取組の適切さ等について評価することにより、学校として組織的・継続的な改善を図ること。
- ② 学校が、自己評価及び保護者など学校関係者等による評価の実施とその結果の公表・説明により適切に説明責任を果たすとともに、保護者、地域住民等から理解と参画を得て、学校・家庭・地域の連携協力による学校づくりを進めること。
- ③ 学校の設置者等が、学校評価の結果に応じて、学校に対する支援や条件整備等の改善措置を講ずることにより、一定水準の教育の質を保証し、その向上を図ること。

2 評価のスケジュール

- 平成 25 年 7 月 第 1 回学校関係者評価委員会（委員長の選出、評価項目ごとの評価担当者の決定、今後の予定等）
- 平成 25 年 9 月 学校関係者評価委員による施設見学、保育・園行事の参観及び教職員
～ 26 年 2 月 との意見交換（ペアレンツセミナー、運動会、園外保育、幼児教育研究会、表現会等）
- 平成 26 年 3 月 第 2 回学校関係者評価委員会（自己評価結果及び改善方策等に関する説明を受けての学校関係者評価の実施と評価報告書の作成等）

3 学校関係者評価委員会委員（平成26年3月現在）

- 大宮 俊恵：徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部准教授
元鳴門教育大学附属小学校校長
- 木下 光二：鳴門教育大学大学院教授
- 須見 高康：前鳴門教育大学附属幼稚園みどり会会長
- 田村 隆宏：鳴門教育大学大学院教授

（50 音順，○は委員長）

4 本評価報告書の内容

(1) 「Ⅰ 学校関係者評価結果」

「Ⅰ 学校関係者評価結果」では、「Ⅱ 評価項目ごとの評価」において、評価項目 1 から 7 のすべての評価項目の内容を総合的に判断し、4段階評価で記述した。

{ 4段階評価の基準 }

- A 十分達成されている
- B 達成されている
- C 取り組まれているが、成果が十分でない
- D 取組が不十分である

また、学校の目的に照らして、「主な優れた点」、「主な改善を要する点」を抽出し、上記結果と併記した。

(2) 「Ⅱ 評価項目ごとの評価」

「Ⅱ 評価項目ごとの評価」では、評価項目 1 から 7 において、当該評価項目が達成されているかどうかの「評価結果」（4段階評価）及びその「評価結果の根拠・理由」を記述した。加えて、取組が優れていると判断した場合や、改善の必要があると判断した場合には、それらを「優れた点」及び「改善を要する点」として、それぞれの評価項目ごとに併記した。

(3) 「参考」

「参考」では、自己評価書に掲載されている「Ⅰ学校の現況及び目的」を転載した。

5 本評価報告書の公表

本報告書は鳴門教育大学に提供するとともに、設置者に提出する。また、ウェブページ (<http://www.kinsch.naruto-u.ac.jp>) への掲載を通じて、広く社会に公表する。

I 学校関係者評価結果

鳴門教育大学附属幼稚園の学校関係者評価は内容を総合し、4段階評価中の「A 十分達成されている」と判断する。

主な優れた点について、以下に列挙する。

○「1 教育課程・指導」において、幼稚園教育要領に基づく指導内容・方法を明確にし、本園の教育課程・指導計画である「生活プラン」を作成している。今年度は文部科学省研究開発の最終年度であり、幼児の科学的思考を促す幼小接続教育課程においては、数量、図形、言葉や文字、協同性の観点から教育課程・指導計画を再編成した。また、5歳児Ⅱ期からの小学校への接続期前期に育てたい数量、図形、言葉や文字、協同性に関する感覚やかかわる力を明示した。5歳児9月から1年生7月までを「接続期」として、幼小の教育内容や方法の接続の方略を示し、「科学的思考を促す幼小接続教育課程の評価要素－鳴門教育大学附属幼稚園方式－」を提案した。

研究の成果を「研究紀要第47集」にまとめ、11月に開催した本園幼児教育研究会において発表したところ、県内外から538名の参会者があり、参会者はもとより文部科学省教科調査官や指導・助言担当者から高い評価を得ていることから、極めて優れた取り組みであると判断できる。

○「4 研修」において、「1 教育課程・指導」でも述べたが、今年度は文部科学省研究開発学校指定の3年目の成果をまとめるべく、「幼小接続の教育課程開発一遊誘財が引き出す科学的思考Ⅲ一」の研究主題のもと研究を進めた。その中で、幼小合同保育／授業や幼小接続部会での意見交換などを通して、幼児・児童それぞれに研究課題やねらいに対応した変容が見られ、教師の認識や態度が変容したことも確認された。さらに、各教員が県内外の多数の研修行事等に精力的に参画したり、参加職員による報告会をもつなどして職員全体で現在の幼児教育に関する最新の情報を共有したりしていることから、研修は極めて充実していると判断できる。

○「6 教育実習」においては、今年度も、幼稚園における幼児との直接的なかかわりの過程を通して、指導教員のもと教職の体験を積み、教員となるための実践上の基礎的な能力や態度を養うことができた。今年度の実習生は、保育に対する思いがとて強く、子どもに向き合う姿勢・教材研究・保育後の反省や記録等、全てにおいて一生懸命取り組んだ。実習の質に伴って教職員の指導も、より高い実践的能力や研究態度を目指すことができたことから高く評価できる。

○「7 センターの役割」において、従来からの研究幼稚園・奉仕幼稚園として、全幼研徳島支部の事務局を本園におき、支部の研修を企画運営（学習会、総会、理事会）している。また、教育研究会や教育講演会の開催、教員の県内外研修会への講演講師の派遣（鳥取県教育委員会・京都市教育委員会・倉敷市教育委員会・大阪府富田林市・兵庫県姫路市・伊丹市・相生市、赤穂市・神崎郡・香川県三豊市・徳島県徳島市・阿南市・美馬市・美馬郡・板野郡・大阪大谷大学主催「幼児期の科学教育国内研究シンポジウム」など22件。）、国立教育研究所プロジェクト研究「子どもたちの論理的な思考の育成にかかわる調査研究」

協力、文部科学省幼保連携型認定こども園保育要領の策定等に関する調査研究協力、他附属幼稚園からの研修受け入れ並びに実地指導国立教育研究所プロジェクト研究「子どもたちの論理的な思考の育成にかかわる調査研究」協力、文部科学省幼保連携型認定こども園保育要領の策定等に関する調査研究協力、他附属幼稚園からの研修受け入れ並びに実地指導等、保育の質の向上に多大な貢献を果たす取り組みとして注目できる。

また、保護者・地域住民との関係においても、保護者に対する幼稚園の保育や環境に関するアンケートの結果から、保護者に十分に理解が得られていることが示唆され、望ましい連携がとられていると判断される。

主な改善を要する点について、以下に列举する。

○「2 保健安全管理」においては、指導計画に基づいて保健指導を実施し、職員会において毎月の指導計画を見直し、全職員で園の保健指導体制やその内容について協議するなど、幼児や園の実態に応じてよりよく改定している。また、危機管理マニュアル（安全管理計画）に基づき、毎日、毎月の安全点検や防災・避難訓練を実施することにより、事故の防止に努めるとともに、幼児に対して安全な避難の仕方を身に付けさせたり、生命や身体を守ることの大切さを知らせることができるようにしていることなどは評価に値する。

また、様々な災害を想定した訓練を実施することで、より安全に避難できるように練習したり、毎年、教職員が救急法の講習会に参加し、救急処置の最新の方法について知識を得る実技講習を実施し、安全対応の能力の向上に役立てたりしている一方で、管理職や養護教諭が不在時の対応や、地震・津波・火災など様々な場面を想定した避難の仕方など、訓練が形骸化しないよう、より多くの訓練を新たに検討する必要があることなどを課題として挙げることができる。

○「3 組織運営」において、研究部・教育実習部・教務部の3部に編成した運営体制を組織し、園務の遂行に努めている。しかし、教育・研究・教育実習・子育て支援等、園の業務内容はますます肥大化しており、定められた勤務時間の範囲内での遂行は非常に難しい状況にある。職員の労働時間の厳守・縮減、業務内容のスリム化、休日確保等に課題が残る。専任教頭制が実現するなどの改善もあるものの、まだまだ人的環境を充実させることが必要である。設置者である大学による早急なる検討が必要であると判断される。

○「5 教育環境整備」においては、環境を通して行うことが基本の幼稚園教育では、施設・設備・遊具・用具等の整備を常に意識し、幼児が生活しやすい教育環境作りに徹している。また、点検のシステムを確立させることで、職員の安全に対する意識を高め、潜在事故の危険性や修理・修繕を必要とする箇所を確実に見つけ出し、附属学校チームや大学施設課による迅速な対応がなされた。環境整備についてのアンケート集計結果は、オープンスクールでは100%が、幼児教育研究会では94.7%がよく整っていると認めている。参観者及び研修会参加者によるアンケート集計結果（資料5-②）では、「施設・設備は、衛生面や安全管理の配慮ができていましたか」では、96%がA・B評価としている。しかし、現在の園舎は、昭和44年に建築されたもので、接合部の雨漏り・モルタルの剥落やひび割れ、配管などの老朽化が目立つので、園舎改修が求められる。教職員による環境整備は入念に実施できているので、施設・設備面での改善を必要とする。

II 評価項目ごとの評価

評価項目1 教育課程・指導

【評価結果】 以下の内容を根拠として、4段階評価中の「A 十分達成されている」と判断した。

(評価結果の根拠・理由)

観点1-1 幼稚園教育要領の内容に沿った幼児の発達に即した指導の状況

観点1-2 幼小の円滑な接続に関する取り組み状況

教育課程に基づく具体的なねらいや内容、環境の構成、教師の援助などの指導細目及び方法等を著した「生活プラン」に基づき、それを踏まえた上で、一昨年度からのテーマである「科学的思考の育成」に沿った年間の指導計画や週案が綿密に作成されている。日々の教育活動として子ども一人一人の育ちを詳細に記録し、それを踏まえて保育実践構築に結びつけられている点で、極めて優れた取り組みであると判断される。

評価項目2 保健安全管理

【評価結果】 以下の内容を根拠として、4段階評価中の「B 達成されている」と判断した。

(評価結果の根拠・理由)

観点2-1 保健計画の作成・実施の状況、園の環境衛生の管理状況

観点2-2 危機管理対策の見直しと強化

保健に関する指導計画を毎月見直し、幼児の実態に応じた健康診断についての工夫や、月ごとにかかりやすい疾病の予防などについて計画が立てられ、それに沿って保健管理や保健指導が実施されている。また、危機管理マニュアル(安全管理計画)に基づく安全点検や防災・避難訓練の実施等、事故の未然防止や安全教育の周知を図っていることは評価に値する。一方で、管理職や養護教諭が不在時の対応や、地震・津波・火災など様々な場面を想定した避難の仕方など、訓練が形骸化しないよう、より多くの訓練を新たに検討する必要があると思われる。幼稚園の避難場所は小学校に想定されているので、様々な非常用の備品や備蓄品などの保管場所の検討が必要である。以上、総合的な見地から、達成されていると判断される。

評価項目3 組織運営

【評価結果】 以下の内容を根拠として、4段階評価中の「B 達成されている」と判断した。

(評価結果の根拠・理由)

観点3 園務分掌や主任制度が適切に機能するなど、園の明確な運営・責任体制の整備の状況

組織運営において、研究部・教育実習部・教務部の3部に編成した運営体制を組織している。3主任を責任者として配置して、それを園長・教頭が統括するという園務分掌を定めていたが、昨年度より園務分掌の見直しを図り、園務の効率化から教頭が教務主任を兼任し、組織運営面での機能強化の実現を図った。教職員が、互いに協力して園務の能率化

・省力化が図れるよう配慮し、「自分は園の一員である」という自覚をもてるよう、各種行事における責任者を分担制（主任・副主任）にし、主体的に園経営に参加できるように努めていることなどが評価に値する。

一方で、教育・研究・教育実習・子育て支援等、園の業務内容は膨大である。分担制で遂行すると時間を有効に活用でき効率的であるのだが、教職員が少人数であるため、同時進行ができていく状況にあることから、教員の増加の実現について改善されることが望ましい。

評価項目 4 研修

【評価結果】 以下の内容を根拠として、4段階評価中の「A 十分達成されている」と判断した。

（評価結果の根拠・理由）

観点 4 園内外における研修の実施及び参加状況

毎週定例の園内研究会や合同研究会で、今年度の研究テーマに取り組んだ。幼児期の遊びや生活の中で芽生えた学びが、小学校での自覚的な学びへとどのような道筋をたどって育っていくのかを考察し、幼小接続の教育課程を作成した。また、科学的思考を促す接続期の教育課程の評価の視点として、「評価要素表」を提案した。日々の保育記録や幼児の記録、エピソード記録等を元に保育カンファレンスを実施し協議を重ねたり、今年度も研究保育を実施したことは、教員の指導力向上に直結し、保育の質の向上に寄与したと思われる。

また、園外での研究会・研修会の参加も多岐にわたり、参加職員による報告会をもつなどして職員全体で現在の幼児教育に関する最新の情報を共有している。このことから、教員の資質向上のための園内外での研修は充実していると言える。

さらに、全国附属校園が集う研究会や県主催の研究会等は、他所属の教員との交流や意見交換ができ、自らの実践を見直したり、新たな刺激を受けたりでき、教員の教育研究へ向かう意欲が高まっている。以上、総合的な見地から、十分達成されていると判断される。

評価項目 5 教育環境整備

【評価結果】 以下の内容を根拠として、4段階評価中の「B 達成されている」と判断した。

（評価結果の根拠・理由）

観点 5 設置者と連携した施設設備の安全・維持管理のための整備の状況

営繕工事要求書に基づき、大学施設課による現場視察が行われ状況把握がなされた。昨年度、予算をかけて従前からの要求が実現されたため、今年度は、幼稚園の運営交付金を利用しての微細な部分の営繕に努めた。

環境を通して行うことが基本の幼稚園教育では、施設・設備・遊具・用具等の整備を常に意識し、幼児が生活しやすいよりよい教育環境作りに徹している。また、点検のシステムを確立させることで、職員の安全に対する意識を高め、潜在事故の危険性や修理・修繕を必要とする箇所を確実に見つけ出し、附属学校チームや大学施設課による迅速な対応がなされた。また、安全点検は複数体制をとるなどして、よく機能している。

施設・設備の不備については、すぐに設置者との連携をとるようにし、教育環境が常に美しく整備されているものの、現在の園舎は、昭和44年に建築されたもので、接合部の雨漏り・モルタルの剥落やひび割れ、配管などの老朽化が目立つので、園舎改修が必要である。

評価項目6 教育実習

【評価結果】 以下の内容を根拠として、4段階評価中の「A 十分達成されている」と判断した。

(評価結果の根拠・理由)

観点6 専門性や実践力を養う教育実習の実施状況

教育専門職にふさわしい実践的能力や研究態度を身に付けること等実習のあり方が整えられ、実習前に実習生が子どもと触れ合える機会を増やすといった工夫により、実習生の子ども理解の深まりや、指導する側の教員が実習生の特性を十分に理解することが容易になり、従来以上に質の高い実習が展開された。

大学から担当教員が来園し、大学と連動した実習のサポート体制も整っている。また、教育実習とは別に、幼年発達支援コースとの自然プロジェクト（フレンドシップ事業による）のボランティアとして学生が保育参加する中で、より幼児理解の深まりや実践力の向上が図られ、実習にもよい影響が感じられたという報告もある。以上、総合的な見地から、十分達成されていると判断される。

評価項目7 センターの役割

【評価結果】 以下の内容を根拠として、4段階評価中の「A 十分達成されている」と判断した。

(評価結果の根拠・理由)

観点7-1 幼児教育関係者への研修支援、教員派遣等の状況

観点7-2 地域住民への貢献

研修支援、教員派遣、研修会会場提供としては、全幼研徳島支部の事務局を本園におき、支部の研修を企画運営（学習会、総会、理事会）、教育講演会の開催、教員の県内外研修会への講演講師の派遣、合同研究会の開催など、幼稚園教育についてや教育の先端的な情報を県内外に広める役割を十分果たしていると判断される。

保護者に対して実施された幼稚園の保育や環境をどのように捉えられるかについて調査するアンケートの結果からも、保護者に十分に理解が得られていることが示唆され、望ましい連携がとられていると判断された。以上、総合的な見地から、十分達成されていると判断される。

参考

I 学校の現況及び目的

1 現況

- (1) 学校名 鳴門教育大学附属幼稚園
- (2) 所在地 徳島市南前川町2丁目11番地の1
- (3) 学級等の構成
3歳児1学級, 4歳児2学級, 5歳児2学級
保育課程 2年保育, 3年保育
- (4) 幼児数及び教員数(平成25年5月1日)
幼児数134人 教員数9人(正規教員)

2 目的

(1) 目的・使命

本園の目的は、附属幼稚園園則第1条において「義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして、幼児を保育し、幼児の健やかな成長のために適当な環境を与えて、その心身の発達を助長する」と定めるとともに、同条第2項では「幼児期の教育に関する各般の問題につき、保護者及び地域住民その他関係者からの相談に応じ、必要な情報の提供及び助言を行うなど、家庭及び地域における幼児期の教育の支援に努める」と定めている。

また、園則第1条には「鳴門教育大学における幼児の保育に関する研究に協力し、かつ、本学の計画に従い学生の教育実習等の実施に当たることを目的とする。」と定めており、具体的には教員養成大学の附属幼稚園として、次のような使命をもった幼稚園でもある。

- ①大学と一体となって、教育の理論及び実践に関する科学研究を行う研究幼稚園としての使命
- ②地域の教育課題の解明、参観者への指導・助言、文部科学省・県教委・地教委等からの要請による教員派遣など、教育界の発展に寄与する使命
- ③鳴門教育大学の学部学生及び大学院生の教育実習等を行う使命

(2) 教育目標

本園は、園則第1条に示されている幼稚園教育の目的の達成のため、次のような教育目標を掲げている。

- ①自主・自立・創造・感謝の精神の芽生えを養うこと。
- ②健康でたくましい心身を養うこと。
- ③それぞれのよさや違いを認め、育ち合う感性を養うこと。
- ④身近な環境に対する興味や思考力の芽生えを養うこと。
- ⑤喜んで話したり聞いたりする態度や言葉に対する感覚を養うこと。
- ⑥創作的表現に対する興味や豊かな感性を養うこと。

(3) めざす子ども像

本園は、教育目標に基づき、次のように「めざす子ども像」を明確に示している。

- たくましい子ども
- しなやかな子ども
- 育ちあう子ども

(4) 平成25年度重点目標

鳴門教育大学・附属学校との連携をさらに密にし、中期目標・中期計画・本年度計画等の実現に努めながら、次の4点から教育目標の具現化を図る。

- ①幼稚園教育要領の趣旨を踏まえた幼稚園教育の具現化を図る。
- ②「遊誘財」研究ならびに幼小接続の教育課程開発研究を深める。
- ③危機管理対策をさらに見直し、その強化を図る。
- ④幼児教育におけるセンター的役割を果たす。

(5) 評価項目

①教育課程・指導

- ・幼稚園教育要領の内容に沿った幼児の発達に即した指導の状況
- ・幼小の円滑な接続に関する取り組み状況

②保健安全管理

- ・保健計画の作成・実施の状況、園の環境衛生の管理状況
- ・危機管理対策の見直しと強化

③組織運営

- ・園務分掌や主任制度が適切に機能するなど、園の明確な運営・責任体制の整備の状況

④研修

- ・園内外における研修の実施及び参加状況

⑤教育環境整備

- ・設置者と連携した施設設備の安全・維持管理のための整備の状況

⑥教育実習

- ・専門性や実践力を養う教育実習の実施状況

⑦センター的役割

- ・幼児教育関係者への研修支援、教員派遣等の状況
- ・地域住民への貢献